

「キャンプ場の個性的な魅力づくり」に関するアンケート調査
～日本、台湾、ヨーロッパのキャンプ場の景観写真による～

○陳盛雄（東京農業大学）

川村協平（山梨大学）

前野淳一郎（スペース・コンサルタンツ）

共同研究

第1章 緒論／研究の動機と、その目的

1970年頃に、漸くモータリゼーションの時代を迎えたアジア地域の台湾と日本（そして韓国等）では、1920～30年代にヨーロッパやアメリカで起こったレジャー様式である「自動車を用いて行なうファミリーキャンピング活動／Camping & Caravanning／オート・キャンプ（日本）／家庭露營（台湾）」が、老若男女・一般の人々の生活のなかに導入され、その後経済的な発展や都市化に伴う自然志向の高まり等を背景に、夫々殆ど同時並行的に普及をして、今日著しい発展・定着を示すに至っている。

尚、青少年の健全育成を目的とした所謂「組織・教育キャンプ」は、これらに先き立って欧米から導入され、現在、上のアジア諸国においても成功裡に発展しつつあるが、ここではこれを一応除外して考えるものとする。従って、ここでとりあげる「キャンプ場」とは、専らこのオート・キャンプ様式を受け入れるオート・キャンプ場を指すものとする。

こうした動きに対して、台湾と日本（そして韓国）の政府（中央・地方）当局は、国民のレクリエーション欲求への対応や地域の観光開発等を目的として、夫々熱心にオート・キャンプ場の建設を進めており、一方民間セクターにあっても、経営の多角化・遊休地の活用・農業形態の変革などを契機として、これまた盛大にその整備が行なわれている。

キャンプ活動の舞台であるキャンプ場に関しては、従来、台湾・日本ともに多くの調査研究報告が見られるが、何れかといえば制度面・施設内容・計画ないし経営手法などに関心が集中していて、「キャンプ場における自然環境のあり方、魅力づくりの問題」や「それらに対するキャンパーのニーズ・好みの把握」といったことについては余り関心が置かれてこなかったように思われる。その結果、なかには高水準の施設整備を指向するあまり、豊かな自然とのふれあいを求めるキャンパー達の志向にそぐわない、人工的な要素の多過ぎる施設も見られるようになってきている。

そこで、今回の調査研究では、台・日・欧の夫々立地環境等を異にするキャンプ場の各部分を写した写真を用いて、年齢・職域（学生、クラブキャンパー、一般キャンパー、行政担当者、キャンプ指導者、キャンプ場計画設計の専門家、キャンプ場管理・経営者）など多様な立場の人々の視点からする「求められているキャンプ場環境の姿・像」を探ることとした。と同時に、台湾・日本・ヨーロッパのキャンパー達のキャンプ場の環境に対する意識についても比較・検討を行ない、更にこの調査の実施を通じ、これらの人々にキャンプ場における自然環境への認識を深めて貰う、という効果を合わせて狙うものとした。

この調査研究の成果が、これからキャンプ場を計画・設計する専門家達や、キャンプ場を開発・運営しようとする人々にとっての何がしかの指針・参考資料ともなれば誠に幸いである。

第2章 アンケート調査票の構成

アンケートに用いる「キャンプ場の写真」は、共同研究者の一人である陳が、ヨーロッ

パ18か国のキャンプ場56か所、日本の43か所、台湾の127か所を訪問して撮影した多くの写真の中から、共同研究者が討議をして適切と判断されるもの36枚を選んで採用した。調査票の内容設定についても同様な論議を経て決定をし、A3版で5頁にわたる中・日両国語による調査票を3000部、台湾においてカラー印刷をした。

最初の頁（表紙裏）には、調査の趣旨・留意事項等と共に、調査対象者に関わる『属性』（年齢、性別、職業、住所、幼少時の住いとその環境、キャンプ経験の延日数）についての記入欄が印刷されている。

第2頁では、キャンプ場が設置されている周辺の『立地／環境条件』に関して、9枚のカラー写真を並べて各人の「好み」を問うている。好きな順に3枚を選んで番号を記入して貰うようにしてある。9枚の写真には、「溪流型」「湖畔型」「海浜型」「河川（畔）型」「森林型」「都市型」「牧場型」「山岳型」「農園型」の、9種類の型を夫々代表するようなキャンプ場の写真を選んだ。その他意見（フリーアンサー）の項目も加えた。

第3頁では『キャンプ場の入り口』の部分の印象を問うた。入り口はそのキャンプ場の「顔」とも言うべき場所で、その造型はキャンプ場の性格を演出する上での重要なポイントとされる。自然・エコロジー趣向か、人工的で豪華なものか、キャンパー達は入り口を一瞥して直ちに読み取るのである。「好きな順に3枚」「嫌いな順に3枚」「自然環境が守られていると思うか否か」を、夫々選んで貰うものとした。その他意見の欄も加えた。

第4頁では、場内のサービス道路を「芝生・草生地」「砂利敷き」「舗装」の3種類に分けて夫々代表的な写真を示し、『場内の道路部分』についての印象（好き、嫌い、自然環境が守られていると思うか否か）を問うた。キャンプ場内の道路には、一般の車道とは異なる配慮がなされて然るべきものである。ただ、写真によるアンケートでは視覚的な判断を得ることはできても、質感や音、匂いなどの感覚についてはキャンパーの経験と想像力に任せる以外にない。例えば晴天時に撮った芝生道路の写真からは、雨天の泥濘持の状況は想像によって判断して貰うしかない。フリーアンサーの記入欄も加えてある。

第5頁では『キャンプサイトの形態』についての印象を問うた。「広場式」「区画式」「植栽による区画式」の3種類の形態について、夫々3枚宛の写真を示し、好き、嫌い等を記入して貰うこととした。キャンプサイトはキャンプ滞在期間中の「住い（就寝、食事、憩いなど）の場所／ルーム」である。広がりのあるところに自由にテントを張る方式（広場式）から、最近は一定の区画（生け垣などで仕切るものもある）の中でキャンプをする方式、はてはバス・トイレ・炊事場付きのデラックスなサイトも登場しつつある。このような趨勢のなかで、現代人がキャンプにどのような生活様式／スタイルを求めているのか、その片鱗でも捕らえてみたいと考えた。その他意見の欄も設けた。

第3章 調査対象者の選定と、調査の実施経緯

『日本における調査』（873部を有効回収）

アンケート調査対象者の選定に際しては第1章で述べたように、できるだけ多様な立場の人々の視点からするアンケートの結果を期待するべく、種々工夫を凝らした。

1「小・中・高校生」：ファミリー・キャンプに参加をする子供達、また将来彼等が成長をして自らこれを実践するようになることを見越して、子供達の意向・意見・意識を探ることとした。その一方で、彼等が現在受けつつある「教育キャンプ」での体験（特に中・高校生）からの意見を徴することにもなることを期待した。小学生については、甲

府市内の4・5年生、山梨県山村部の5年生、長野県山村部の1～3年生、計118人。中学生については甲府市内の1・2年生、長野県山村部の1～3年生、計140人、高校生については山梨県内2校の1・2年生の164人から、クラス担任を通じて有効回収を得た。回収率は100%であったが、記入漏れの者5名は集計から外した。

- 2「大学生」：山梨大学教育学部の1・2年生、工学部の1年生に対し、授業時間に調査を行ない118人の有効回収を得た。学生達の出身地は全国に及んでいる。また、東京大学の農学部で森林科学を専攻している学生19名に対して面接・配布によるアンケートを行ない、全量を回収した。立教大学の社会学部観光学科の学生10名に対して同様のアンケートを行ない、全量を回収した。計147人。
- 3「キャンピング・クラブ所属のキャンパー」：日本オート・キャンプ協会の正会員である101のクラブのなかから、地域別の配分や各クラブに所属するキャンパーの数などを考慮しながら47クラブ(150人分)を選定して、各クラブ会長宛にアンケート用紙を郵送配布して回収方を依頼した。88名の回収という低調に終る結果となった。
- 4「オート・キャンプ場経営者(管理者)(+一般キャンパー)」：日本オート・キャンプ協会の賛助会員、オートキャンプ研究会会員、ACN加盟キャンプ場のなかから、全国的な配分や公営・民営の配分等を考慮して105ヶ所を選び、夫々の「管理者」に彼自身と来場のキャンパー(クラブキャンパーを除外)からの意見回収方を依頼した(計167通)。シーズン多忙中ということもあってか、経営者68名、キャンパー47名と、回収率はやや低調であった。その他、1997年8月に三重県で開かれた全日本ファミリーキャンプ大会に参加した陳が、会場のキャンパーから23通を有効回収した。
- 5「キャンプ指導者」：日本キャンプ協会に依頼して、全国の中級・上級指導者からランダムに抽出し、50通を郵送40人を回収した。記入漏れ2名は集計から除外した。
- 6「オート・キャンプ場計画・設計の専門技術者/企画者」：日本オート・キャンプ協会の賛助会員から7社、(財)国立公園協会が主催する自然環境保全フォーラム会員から7社、オートキャンプ研究会会員の設計事務所から22社、何れにも属さないコンサル・造園設計事務所から11社(計47社)を選んで郵送配布し、40人分を回収した。

『台湾における調査』(905部を有効回収)

「小学生」：中華民国露營協会が1996年7月に行なった児童サマーキャンプの際に62部を、「中学生」：台湾の場合、中学には「ボーイスカウト教育課程」があって殆ど全ての生徒にキャンプの体験がある。都市、町、村、離島の学校から137部を、「高校生」：中学と同様ボーイスカウトのキャンプと軍事訓練課程のアウトドア体験がある。都市、町、村そして職業高校など15校から183部を、「大学生」：国立師範大学、文化大学、東呉大学の、夫々ボーイスカウト学科、環境教育研究室、景観企画学科、経済学科の学生・大学院生から96部を、夫々有効回収した。

「キャンパー」：中華民国家庭露營/露營各協会のメンバーや、坪林金溪キャンプ場の来場者から115部を、「キャンプ指導者」：学校・ボーイスカウトなど各分野の指導者から112部を、「キャンプ場管理者」：183部発送して115部を、「キャンプ場専門技術者」：中華民国造園学会会員、国家公園・交通部・建設局・旅遊局等の技術者名簿から174人を選び85部を、夫々有効回収した。

『ヨーロッパにおける調査』(107部を有効回収)

1996年の夏、ハンガリーの Balaton湖畔で、10日間にわたって行なわれた国際キャンプ連盟 (Federation International De Camping Et De Caravanning 略称 F.I.C.C.)の大会に参加した陳が、持参した英語訳のアンケート用紙を用いて面接調査を行なった。多くの参加者が調査に興味と関心を寄せて協力をしてくれ、11カ国107人の人々から貴重な有効回答を得た。

第4章 調査結果の分析と結論

各種分析の結果については別途、図・表等によって示すものとするが、特に注目された総合分析結果の欧・台・日比較などについて、その概要を以下に述べるものとする。

- 1『立地環境』：台・日・欧共に、「湖畔」と「溪流」が圧倒的な支持を得ている。一方「都市」型は何れの国でも人気は最低だが、台・日にはこのケースが殆ど無いことからこの結果については理解できる。しかしヨーロッパ人にとっては日常的な都市型であるものの、やはり彼等は自然を求めてキャンプをしているということなのだろう。台湾の子供達と、日本の子供達と一般キャンパーに「牧場」型の好みが多いのは興味深い。
- 2『入り口の意匠と自然環境の保全』：何れの国でも「日本のヤナセモトスパーク」の入り口部分に高い評点が与えられている。「圧倒的なグリーン」に入っていく仕組み、が支持されたのかもしれない。一方、余りにも人工色の多い「台湾の中正」と「日本のマオイ」は両方とも三者から忌避されている。
- 3『場内の道路部分』：第2章に述べたように、この場面に対しては多面かつ多角的な判断が可能なので、「草生」「砂利」「舗装」夫々の好みは分散する結果となった。一方、自然環境の保全状況の問いに対しては、一律に「草生・芝生」が1位で「砂利」「舗装」がそれに続くという、常識的な結果となった。
- 4『キャンプサイトの形態』：何れの国においても「区画サイト」が「好みの度合い」において支持されており、なかでも「植栽区画サイト」に最も人気が集まる、という結果となった。「広場型」に用いた写真が、いずれもテントや車の込み入った窮屈に見えるものだったので受け入れられなかったのかもしれない。「広場型」にはそれなりの「良さ」があり、ヨーロッパにはこの種のもものが多くみられるのだが・・・。サイト内に人工的な装置類を持ち込んでセットしたものについては批判的な結果が出た。「自然環境の保全状況」への問いに対しては分散した結果が出た。「写真」に撮られたキャンプ場と、夫々の国で通常行なわれているキャンピングスタイルへの馴染み（ヨーロッパではキャラバンが多い）、という点もからんでいるのであろう。

以上の調査を通じて、欧・台・日いずれの国々の人々も、年齢・階層等を問わず、キャンプ活動に求めているのは「自然と（そして人々と）の触れ合い」であり、キャンプ場に求めているものも「人工と自然の調和・バランス」にある、という結果が得られたものと考えている。今後一層、こうした問題についての調査研究に励んで参りたいと思う。

尚、調査の過程で多くの「フリーアンサー」を得たが、そこには夫々キャンプに対する熱烈な「思い」が述べられており、貴重な意見が数多く開陳されていた。調査の方法等についても疑念・意見を含めて示唆に富むご意見を賜った。

本調査を実施するに当たってご協力を頂いた、欧・台・日の沢山の方々に対して、ここに深甚の謝意を表する次第である。